

[年度] 平成28年度和歌山県農林水産試験研究成果情報

[成果情報名] イチジク株枯病の防除対策

[担当機関名] 果樹試験場かき・もも研究所

[連絡先] 0736-73-2274

[専門分野] 果樹

[分類] 普及

[背景・ねらい]

県内のイチジク産地では、イチジク株枯病（図1）の発生により、収量の減少、樹勢低下、枯死樹の発生が増加しているため、防除対策が望まれています。

そこで、イチジク株枯病に対する薬剤の防除効果および抵抗性台木の導入による防除効果の実証試験に取り組みました。



図1 イチジク株枯病（重症）

[研究の成果]

1. 発病園において健全な「柵井ドーフィン」の株元にテブコナゾール水和剤や無機銅水和剤（塩基性硫酸銅 28.1%）を土壌灌注することで、イチジク枝の枝挿し法による発病が軽減（図2）され、土壌中の病原菌量が低下したと考えられました。両薬剤ともに当年の結果枝長は無処理区に比べ長い傾向（図3）であり、良好な生育を示しました。

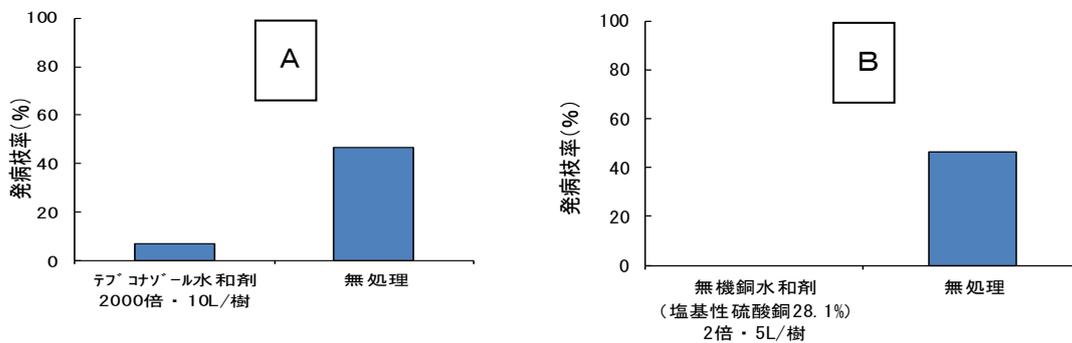


図2 薬剤を灌注処理した土壌への枝挿し法※による病原菌の検出

注) 図A：和歌山市発病園、薬剤処理：平成26年4月23日、5月20日、6月25日、土壌調査：最終処理の4ヵ月後

図B：紀の川市発病園、薬剤処理：平成27年4月28日、土壌調査：最終処理の5ヵ月後

※イチジク枝の枝挿し法：発病園の土壌をカップに入れ、イチジク枝を挿入する病原菌検出方法（梶谷1995）

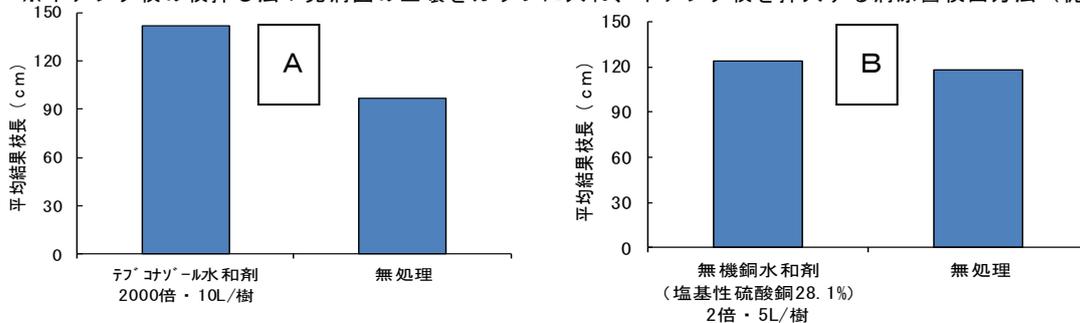


図3 発病園における薬剤の土壌灌注処理後の結果枝長

注) 図A：和歌山市発病園、薬剤処理：平成26年4月23日、5月20日、6月25日、調査日：同年10月8日

図B：紀の川市発病園、薬剤処理：平成27年4月28日、調査日：同年7月14日

2. 発病園に定植した株枯病抵抗性台木「キバル」に接いだ榊井ドーフィンは、定植2年目の時点で発病は認められません。同時に定植した自根苗では枯死するものがみられ、「イスキアブラック」台の榊井ドーフィンでも発病苗が発生しています（図4）。また、「キバル」台の榊井ドーフィン、他の苗に比べ生育が優れます（図5）。

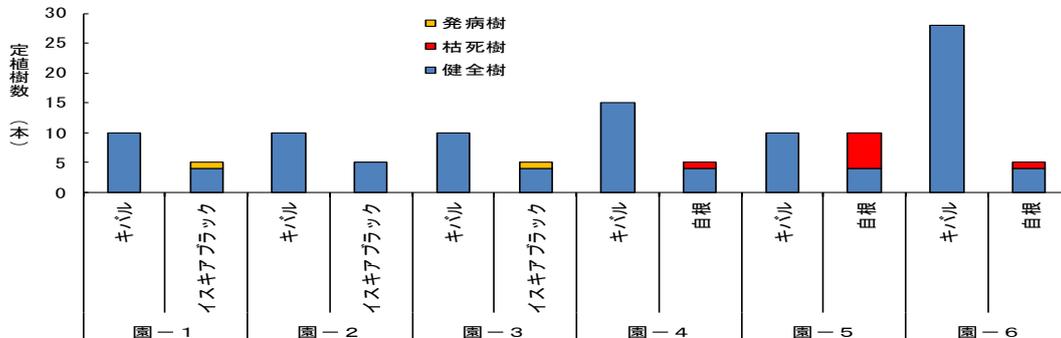


図4 抵抗性台木「キバル」「イスキアブラック」定植2年目の発病、枯死樹数

注) 品種：榊井ドーフィン、平成27年1～2月に定植

園-1～3：和歌山市発病園、園-4～6：紀の川市発病園

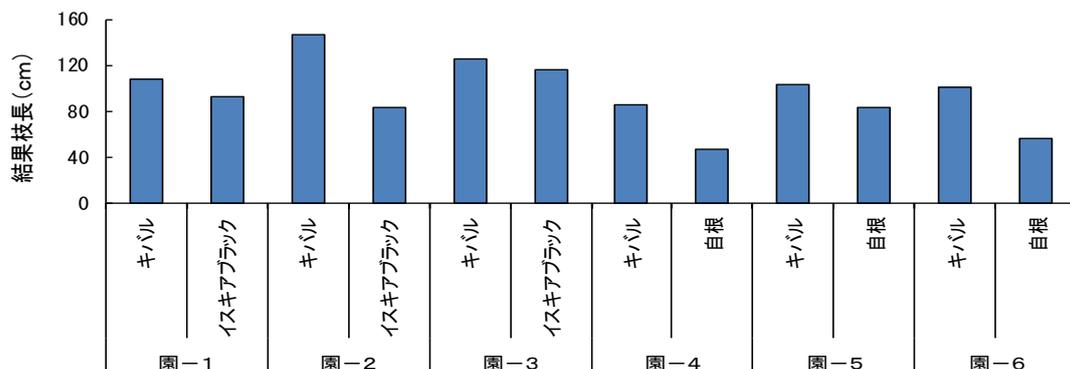


図5 抵抗性台木「キバル」「イスキアブラック」定植2年目の結果枝長

注) 品種：榊井ドーフィン、平成27年1～2月に定植、調査時期：平成28年11月

園-1～3：和歌山市発病園、園-4～6：紀の川市発病園

[成果のポイントと活用]

1. 薬剤防除と抵抗性台木の併用で、より高い効果が得られ、発病園での改植において被害軽減が期待できます。
2. 本病はアイノクイムシによっても伝染するとされており、この防除を含めた総合対策の実施が重要です。
3. テブコナゾール水和剤、無機銅水和剤（塩基性硫酸銅 28.1%）は、平成29年6月現在本病に対して登録があります。ただし、登録内容は変更される場合があるので、使用の際には最新情報を確認してください。

[その他]

予算区分：県単（農林水産業競争力アップ技術開発事業） 研究期間：平成26～28年

研究担当者：間佐古将則、弘岡拓人、木村 学

発表論文等：なし ホームページ掲載の可否：可